

第76回全日本新体操選手権大会
団体決勝、個人決勝レポート（10月29日）

昨日の個人総合は激闘であったが、本日は各種目のスペシャリストが決勝に駒を進め、種目別の王者を決める。予選の点数からみてもかなりの高得点が期待できる展開になること間違いなしだ。

そして、大会の最後には団体決勝が開催される。予選を勝ち抜いた上位8チームによる日本一決定戦からも目が離せない。

会場に訪れた多くの観客の声援に後押しされて選手たちのベストパフォーマンスを期待したい！

【種目別スティック】

第3位 東本 侑也（同志社大学）18.600

個人総合チャンピオン東本が完璧な演技を披露したが、それでも3位であったほど今回のスティックはレベルが高かった。予選以上の出来で18.600の高得点を獲得し銅メダルを獲得した。

第2位 岩淵 緒久斗（青森大学）18.625

今大会の岩淵が一本にかける気迫には目を見張るものがある。これまでの全てをぶつけることができた一本は最高の演技であった。東本をわずか0.025上回り、銀メダルを獲得した。

優勝 尾上 達哉（花園大学）18.825

その岩淵を上回ったのが尾上であった。予選では衣装減点もあり思うように得点が伸ばせなかったが、ここではその予選のフラストレーションを払拭するかのような会心の演技で金メダルをつかみ取る

【種目別リング】

第3位 堀 孝輔（高田RG）18.250

やはり強い。このリングでは若干上位が乱れる中、確実に演技切る力を後輩達に見せてくれる。彼の経験値や存在はもはや男子新体操界の宝と言っても過言ではない。見事に今大会自身初のメダルを獲得した。

第2位 尾上 達哉（花園大学）18.425

尾上の集中力には心底感服する。一種目目からまだそれほど時間が経過していない中でこの一本。惜しみなく感情を前に押し出しグイグイと自らの世界観に引き込んでくれる最高の演技であった。

優勝 森谷 祐夢（国士舘大学）18.725

個人総合では、初日首位で折り返し2日目に崩れ5位に甘んじた森谷が凄まじい演技を見せてくれた。予選よりも演技難度を上げてこの決勝で最高のパフォーマンスを披露し、個人総合の鬱憤を晴らすかのような会心の演技で金メダルを勝ち取った。

【種目別ロープ】

第3位 岩淵 緒久斗（青森大学）18.275

予選では冒頭の投げ上げで少し乱れたが、決勝ではやり切って見せた。岩淵の大きな動きと手具操作が躍動的にフロアを駆け巡った。予選より得点を上げ、銅メダルを獲得した。

第2位 堀 孝輔（高田 RG）18.300

予選から通じて本当に安定している。この種目トップの点数で予選を通過し決勝でも気迫のある素晴らしい演技を披露した。ミスが多いロープでこれだけ安定感のある演技ができることが堀の強さであるのではなかろうか。正にオールラウンダーだ。

優勝 尾上 達哉（花園大学）18.350

本当に勢いがある演技者である。堀や岩淵とは全く違うタイプの選手だ。ロープの最終演技者で登場しこの演技には感服する。堀を抑えて見事金メダルを獲得した。

【種目別クラブ】

第3位 田窪 莉久（青森大学）18.125

ここ一番の田窪の本番強さにはいつも驚かされる。この種目は昨年種目別優勝した相性のいい種目だ。そしてこの決勝では予選から曲を代えての登場したが、見事ノーミスで演技きった田窪に拍手を送りたい。

第2位 尾上 達哉（花園大学）18.700

最高の出来ではなかったであろうか。本人のラストを飾るにふさわしい内容であった。この演技に感謝の言葉を送りたい！尾上選手ありがとう！！

優勝 東本 侑也（同志社大学）18.850

個人総合王者が最後に見せてくれた。切ないメロディに万感の想いをのせて見事に演技切った。予選よりも完璧な演技で本大会最高得点の18.850で金メダルを勝ち取った。

【男子団体決勝】

第3位 大垣共立銀行 OKB 体操クラブ 16.400

勝負とは本当にわからないものである。予選7位で通過した OKB が見事銅メダルを獲得した！OKB 史上初の快挙である。また、チーム内に中学生を擁してのメダル獲得は恐らく男子新体操史上初でもある。予選よりも内容を上げて臨んだ決勝では、いま出来る最大が出せたといっても過言ではないであろう。持ち前のタンブリング力を武器に次々と技を決めた。ラストで少し乱れる場面もあったが大きな減点には繋がらず嬉しいメダル獲得だ。

第2位 国士舘大学 18.325

本大会では上位2チームが抜きんでていた。その一つが国士舘大学である。予選で会心の演技を披露し、決勝の一発勝負に賭ける。しかし、国士舘の十八番である第一タンブリングの伸身ダブル交差が僅かに乱れる。そのミスがこの僅差の戦いでは大きかった。2020年ぶりの優勝を目指したが一步及ばなかった。また来年に期待したい。

優勝 青森大学 18.875

やはり王者は強かった。2021年からの3連覇を飾った。序盤から目まぐるしく動く隊形移動。そして高さと安定感のあるタンブリングは見る者を圧倒した。序盤から運動量が多いが終盤になっても、そのパフォーマンスは衰えることがない。終始安定感のある動きで見事優勝を勝ち取った。

今年の全日本もこれで終幕。ここに賭けてきた選手たちの一年間が終わった。毎年選手たちは今が最高峰と思える演技を披露してくれる。しかし、その次の年にはそれを超える選手たちが現れる。選手たちの向上心と男子新体操の持つ可能性は尽きることがないと常々感じる。

今大会は武蔵野の森総合スポーツプラザという素晴らしい体育館での大会開催。会場には連日沢山の観客が集まり、時に歓喜し感動し感涙した3日間であった。来年、国民体育大会（新名称：国民スポーツ大会）に男子新体操復活がきまり、男女共にこの素晴らしいスポーツが日本国内外に向けて、より多くの日の目を見ることを信じてやまない。

（男子新体操委員会：山田小太郎）